

第18話 本能寺の変

すでに武田氏を滅ぼして、東方を平定した信長は、まさにその勢いを以って西南の征服に向おうとする。しかし、たまたま明智光秀のために弑せられて、全国平定の業が半ばにして挫ける。

天正10年5月、徳川家康は、さきに甲州征伐の恩賞として駿河を賜ったお礼を述べるために、居城浜松を発して、安土の織田信長のところに会いに来ることにしました。

徳川家康の接待役

徳川家康が信長に取って、いかに大切な身方であるかは、皆さんもすでによく知っているでしょう。浅井、朝倉、武田らの諸氏に対する実戦の上で、信長は援助を受けたばかりではありませんでした。信長が単独に兵を諸方に出して、心おきなく征伐をつづけることの出来たのもまた、家康がよく信頼出来る同盟者として、常に東海道を固く抑えていてくれたからです。

それで、信長は大いにこれを徳としていたので、今、この大切な尊敬している客人に対して粗略のことなどの無いようにと、特にその接待役を明智光秀に命じました。

光秀は頗るこれを光栄とした。彼はわざわざ人を堺に走らせて、珍物や名器を集め、結構なご馳走の用意などをして、その日の来るのを待っていた。

家康は5月15日に安土に着いた。彼は先づ信長に先のお礼を述べた上で、幾日かをここに滞在して信長の歓待を受けることにしました。

中国征伐の援兵

ところが、この時、たまたま中国地方の備中の高松城を水攻めにしていた羽柴秀吉から信長に援兵を求め急使が来た。折りしも五月雨の頃の事で、毎日の雨つづきに、次第に次第に水嵩が増し、やがて高松城は水底に没しようとしていたので、毛利の大群がこれを救いに来たのです。これを好機会に一大決戦をして、毛利を滅ぼそうというのが、秀吉の考えだったのです。信長はこの知らせを受けると大いに喜んだ。彼は自ら出陣することにして、先づその先鋒を明智光秀、細川忠興、池田信輝、塩川国満、高山友房、中川清秀らの諸将に命じて、おのおの本国に帰って、至急に出兵の準備をするようにと言いました。

明智光秀の叛

そこで、光秀もまた、にわかに家康接待の用意を止めて、17日に安土を出発したが、折角心を籠めて用意をしているのに、忽ちその役を他の者に代わらせられて、ご馳走や何かのすっかり無駄になったので大いに憤慨した。彼は、この時、折角集めた饗応の器物や何かを琵琶湖に投げ込んで、謀反の決心をしたとも伝えられている。

第18話 本能寺の変

けれども、これには予ねてから抱いていた幾つかの不平も一時に勃発したのでしょう。彼が信長のために「母親殺し」の汚名を被せられたことは前に述べたが、この他にもまだ飲めといわれた酒を辞退したために、信長に捻ぢ伏せられて、「酒をのまずば刀を飲め」と抜き身を口許に突きつけられて止む無く酒を飲んだこともあれば、頭を小脇にかかえられて、「よい鼓だ」と、ぼんぼん打たれたこともある。又、信長の理不尽な命令を拒んだために、髪をつかんで引き据えられて、頭から血を流したこともありました。

しかし、とにかく、光秀は安土を立ったその日に、本城である西近江の坂本城に帰ると、急いで出兵の準備をして、26日に丹波の亀山に来た。そして翌27日に愛宕山（亀山の東北約12km）に登り、その夜は神前にこもって武運長久を祈り、2～3度、鬨を取って運を定めたといわれる。

翌28日、光秀は連歌師の里村紹巴らと共に連歌を作って神前に納めたが、その時、彼は発句に、「ときは今あめが下知る五月哉」と詠んだ。明智氏はもと土岐氏の一族ですから、時と土岐とをかけて、天下を治めようという決心を詠み込んだのであります。さすがに紹巴はすぐにこれを悟ったので、その第3句に、「花落つる池の流れをせきとめて」とつけて、それとなく謀反の企てを止めようとしたということです。

本能寺の変

一方、信長は、家康を安土城で幾日か鄭重にご馳走した上、京都、奈良、大阪、堺などの名所々々を心のどこかに見物するようにと、案内者をつけて21日に出発させて、自分は29日に、僅かに近臣数十騎を率いて京都に上り、本能寺を宿とした。この時、彼が不用意にも殆ど兵士らしい兵士を率いていなかったのは、今度、中国には京都からすぐに出発することにしていたので、諸将を一旦皆その領国に帰らせて、命令の下り次第に兵を率いて来させることにした為でした。

長子信忠もまた、信長より先に上京して二条の妙覚寺に泊まっていたが、兵はいくらかも率いていなかったのです。

さて明智光秀は、六月朔日の夜、明智左馬之助光春、齊藤内蔵助利三ら5人の者に初めて謀反の決心を漏らして、その夜半に、にわか20,000騎の兵を率いて亀山を出発した。中国に向うには、当然、西のほうの播州路を取るべきですが、彼は馬首を東に向けて、老の坂を越えた。そこからもまだ、右に行けば山崎から西国街道に出れる。ところが、光秀は左を取って京都に向った。部下の者には、この軍勢の盛んな様を信長公のご覧に入れるのだと言ったということです。こうして2日の未明に京都に入って、急に本能寺を囲んで攻めかけました。

信長の自殺

その物音に信長は驚いて起き上がった。「さては謀反か、誰だ？」と彼は言った。小姓の森蘭丸が門外を見て帰って、光秀が謀反した由を告げると、信長はあわてずに、「思いがけない事だが、是非もない」と言っ、自ら弓を執って数多の敵を射斃した。しかし、やがてその弦が切れると、今度は槍を執って防いだ。そうこうするうち、蘭丸以下の近侍の者もみな奮戦して死に、自分も右の肘に槍疵を受けたので、今は之までと諦めて、部屋に火を放って自殺した。時に年は49才でした。

第18話 本能寺の変

信忠の自殺

妙覚寺にいた織田信忠は、本能寺の変を聞いて急いで馳せて父の難を救いに出かけたが、途中で本能寺に火の起こるのを見て、去って二条の城に拠った。けれども、ここもまた間もなく光秀の軍に囲まれたので、家来の前田玄以に、「急いで岐阜に帰って、三法師（信忠の長子秀信の幼名）を清洲に連れて行くように」と命じて、自分は大いに力戦して自殺した。時に26才でした。

信長の勲功

ああ、信長！ さきに勅りを拝してから、専ら天下を平らげて叡慮を安んじようとしていたのに、その業が將に成ろうとしたところで、忽ち逆臣の手に斃れたのです。その身にしてもさぞかし残念だったでしょうが、今日からその事蹟を追想し、回顧する者にとっても、まことに残念です。

とはいえ、彼が出でて全国平定の基礎を固めたのでこそ、次に出了た秀吉が容易に海内統一の大業をも成し遂げたのです。その勲功は大きいのです。そうして正親町天皇はこれを賞して、特に太政大臣従一位を贈られ、後に、大正天皇は特に正一位を贈られた。今、京都市上京区紫野北船岡町に在る別格官幣社建勲神社は、すなわち織田信長を祀った社です。

事変後の光秀

さて明智光秀は、信長を弑（訳注：上の者を殺すこと）して京都を占領すると、転じて近江に入って、安土城を奪い、城中の財宝を分けて將士に与えた。けれども、婿の細川忠興を始め、光秀が招けば来るであろうと思っていた親しい諸將らもまた、ついに1人として彼の身方になろうとする者が無かった。それで、安土には左馬之助光春を留めてこれを守らせ、自分は京都に引き返して、先づその根拠を堅めるために、市内の宅地税を免除したり、著名な寺々にお金の寄付をしたりして、ひたすら人望を得るのにつとめた。

家康の帰国

この時、徳川家康は、すでに堺の見物を済ませて、まさに京都に入ろうと北河内まで来て本能寺の変を聞くと、すぐに上京して光秀を討とうとした。しかし遊覧中のことで兵も少なく、且つ遠く本国を離れていたもので、家来らはしきりに諫めて、「ともかくも一旦ご帰国の上、大軍を催してからになさるがよい」と言って止めたので、急に道を転じて伊賀から伊勢に出て、船で三河に帰った。

諸將の遲疑（ぐずぐずしたこと）

信長の次男の信雄（訳注：既に伊勢の北畠氏に養子入りした）は、伊勢に居て変を聞くと、すぐに兵を



織田信長の墓
滋賀 安土城の天守閣址に在る。

第18話 本能寺の変

率つちやまいて近江の土山しゅつじんまで出陣しばらしたが、そこで暫く様子ようすを見ていた。また、その弟の信孝のぶたかは、丹羽長秀にわながひでらと共に四国征伐しこくせいばつに向おうとして、堺から船に乗ろうとしていた時に知らせを受けて、あわてて大阪に引き返したが、これもそこで様子を見ていた。彼等かれらは、その兵だけでは光秀みつひでと戦たたかえるかどうかあやが危ぶまれたからです。

またこのころ、柴田勝家しばたかついえは越前にいて、越後の上杉景勝うえすぎかげかつと対峙たいちしていたし、滝川一益たきがわ かずますは上野で北條氏こうづけ ほうじょうと対峙たいちしていた。羽柴秀吉はしばひでよしが備中もうりで毛利氏たいじんと対陣していたことは前に述べた通りです。彼等はいづれも、早急さつきゅうには上京じょうきょうすることなどは出来そうにもなかった、

ここが光秀みつひでの恃むところでした。彼は、彼等が留守るすの間に、早く近畿地方あいだを定めて、地歩さだを固く占めようとした。

ところが、機敏きびんな秀吉ひでよしは、案外あんがいにも急きゅうに毛利もうりと和睦わぼくして東上とうじょうして来た。そして忽ちたちまち山崎やまさきの戦たたかいが開かれて、明智光秀みつひでは誅ちゅうされました。

こうして秀吉ひでよしの時代が始まりましたが、それは次の話に述べることにします。

(第18話 本能寺の変 終わり。 次は前頁に戻り、第19話 山崎の戦い へ)